

てんごくこうえん 天国公園



「ご乗車くださ〜い! 天国公園行きの列車が出発いたしま〜す!」 駅長さんが大声で呼びかけました。

タラとマレクとミコとジェシーが、ガイドのスザンナといっしょに天国公園行きの列車に乗りこみました。天国公園とは、子ども向けに造られた天国のアドベンチャーパークです。

天国列車は、地上の1900年代初期に走っていた蒸気機関車に似せて造られました。蒸気機関がどのようなしくみで動くかがわかるように、車体は透明にできています。子どもたちがエンジン室をのぞきこむと、二人の人がシャベルで燃料をすくう手を止めて、手をふりました。彼らがシャベルですくっていたのは、地上の蒸気機関車で使われていた石炭ではなく、天国のエネルギー・クリスタルでした。それは、エンジン室の水を力強い蒸気にするのに使われていました。とても強力なので、列車は走るというよりも、空を飛んでいました!

「きっと、あれが天国公園ね!」とミコがさげびました。

「ええ、そうよ。」とスザンナが答えました。「じきに、公園の駅に入るわ。」

スザンナと子どもたちは、列車から降りました。彼らの前には、お好みコースが記された看板が立っています。「かなたの世界」、「チェンジの小道」、「夢中になれる小道」、それに「歴史アドベンチャー」です。

「うわあ、わたし、^か変わるの^{だいす}大好き！」とタラが言いました。「^いチェンジの^{こみち}小道に行きましょうよ。
^{なに}何かがあるのかしら？」

子どもたちは公園の中へ向かってのびている、^{なが}流れるようなピカピカの道^{みち}を歩いたり、^{はし}走ったり、はねたり、スキップしながら、^{すす}進んでいきました。

「どうしてこれが^{こみち}チェンジの小道なのかしら？」 タラが^{きょうみしんしん}興味津々の声^{こえ}で言いました。すると・・・

「おどろきだわ！
わたしたちが^き着ている
服^{ふく}を見てよ！ みんな、
^{あた}あたらしい^{たの}楽しい^{ふく}服を着ているわ。だけど、
どうしたらこうなったのかしら？」

「わからないな。」と
ジェシー。「でも、タ
ラが『チェンジ』って
い^{とき}言った時に、そうなっ
たみたいだよ。」

すると、^{いま}今まで^{ある}歩
いていた道^{みち}が^{だい}すべり台に
か^{くだ}変わりました。下り
になったり^{のぼ}上りになったり、
ぐるぐる^{まわ}回ったり、
ジグザグになったり、

^{ほし}星や^{わくせい}惑星が^ち散りばめられた^{うつく}美しい^{けしき}景色の中を、^{すす}ビューンと進んでいきました！

子どもたちは、すぐにそのからくりがわかりました！ ^{つぎ}次にミコが「チェンジ」と言うと、^い頭上^{ずじょう}
の^{みずいろ}水色の空が、^{そら}緑、^{みどり}青、^{あお}紫、^{むらさき}ピンク、^{きいろ}黄色のうずになりました。

子どもたちは、^{ねっしん}熱心に「チェンジ」という^{ことば}言葉を^い言いながら、そのたびに^お起こるいろいろな
^{へんか}変化を^め目いっぱい^{たの}楽しみました。

チェンジの^{こみち}小道のとちゅう、子どもたちは^こ等身大の^{とうしんだい}しょうがパンぼうやの^{いえ}家の^ま真ん前^{まえ}に降ろ
されました。中には、^{なか}大きな^{おお}きのこの^{ちい}テーブルがあり、小さな^{ちい}きのこの^{ちい}いすもそろっていました。



「楽しそう！」とマレクが言
いました。「中に入ってみよう
よ。」

子どもたちは小さな家の中
に入り、テーブルを囲んでき
このこのいすにすわりました。
マレクがテーブルの真ん中
にある赤いボタンをおすと、人
の形をした小さなしょうがパ
ンぼうやが飛び出してきて、
ぺこりとおじぎをしました。

「いらっしゃいませ、巨人の
皆様。皆様のために、天国の
珍味を用意してございます。

このボタンをひとつおしするだけで、特別なシャーベットメーカーが、皆様のお好みのシャーベット
をすぐにお作りいたします！ ええっと・・・ お子様方は、マンゴーにストロベリー、それにチェ
リー・シャーベットがお好きと見えますね。では、とびきりの味をご賞味ください！

そう言うと、その小さなしょうがパンぼうやは、いそいそとシャーベットをよそってくれました。

「天国って、わくわくすることやおいしいものでいっぱいなんだね。」 マレクがとてもうれしそ
うに言いました。

「それは、すべてが、わたしたちへのイエス様の愛を表すために造られているからよ。」とス
ザンナが説明しました。「いい考えがあるわ。あなたたちがみんな、同時に例の言葉を言ったら、
何が起こるかしら？」

「やってみましょうよ。」とタラが言いました。

「1, 2の3・・・チェンジ。」子どもたちがいっせいに声を上げました。

すると、今度のチェンジは今までとちがい、子どもたちは二つのグループに分かれて、別々の
場所へ転送されました。

タラとジェシーは、「チョウの羽ばたき」コーナーに来ていました。子どもたちの周りでは、羽
の大きさが差し渡し2メートルもある、巨大なチョウたちが羽ばたいていました。すると、ジェシー



とタラにも、チョウの羽^{はね}がある
ではないですか。それに、
ちょうど自分^{じぶん}のうで^{あし}や足を動
かす時^{とき}と同じように、思いの
ままに羽も動きます。ひとた
び自分^{じぶん}の羽^{はね}になれると、二人
はチョウたちといっしょに、巨
大^{だい}ヒマワリ^{はな}の花^{はな}畑^{はたけ}へと羽^はばた
いて行きました。そこで二人
は、チョウたちといっしょにか
くれんぼ^{あそ}をして遊びました。



さて、ミコとマレクとスザン
ナは、どこへ行ったのでしょ
うか？ 三人^{さんにん}は、巨大^{きょだい}な草花^{くさばな}で
いっぱい^{こころ}の、心がうばわれるよ
うな「ふしぎ^{しよくぶつえん} 植物園」にいました。

「ここでは草花^{くさばな}に比べて、わたしたちがものすごく小さいのね。」とミコが言いました。「地球^{ちきゅう}
上^{じょう}の草花^{くさばな}と比べると、わたしたち、まるでアリになったような気分^{きぶん}だわ。あら、見て！ 妖精^みだわ！」

「色^{いろ}についての歌^{うた}を歌うとね・・・」と妖精^{ようせい}が言いました。「バラの色^{いろ}が、歌^{うた}っている色^{いろ}になるのよ！」

「赤^{あか}、黄色^{きいろ}、緑^{みどり}、青^{あお}！ イエス様^{さま}、イエス様^{さま}、愛^{あい}しています！」とミコが歌^{うた}いました。

するとふしぎなことに、バラの色^{いろ}が、歌^{うた}に合わせてどんどん変^かわり始^{はじ}めました。赤^{あか}、黄色^{きいろ}、緑^{みどり}、
そして青^{あお}！ ミコが歌^{うた}っていると、だれが現^{あらわ}れたと思^{おも}いますか？ ほかでもない、子^こどもたち^{どもたち}の
最^{さい}高^{こう}の友^{とも}だちであり、またお兄^{にい}さんである、イエス様^{さま}ご自^じ身^{しん}が現^{あらわ}れたのです！

イエス様^{さま}はミコとマレクの手^てを取^とって、ぐるぐる、ぐるぐると回^{まわ}りました！

「楽しんでるか？」とイエス様^{さま}が聞^ききました。

「もちろんです、最^{さい}高^{こう}に！」と子^こどもたち^{どもたち}が答^{こた}えました。

「それはよかった。」とイエス様^{さま}が言^いいました。「この公^{こう}園^{えん}にあるものはすべて、わたしの愛^{あい}を
君^{きみ}たち^{たち}に示^{しめ}すために造^{つく}ったんだ！ 君^{きみ}たち^{たち}へのわたしの愛^{あい}は絶^たえることがなく、またいたるとこ
ろにあるんだよ！ 決^{けつ}して、変^かわることはないからね！」

イエス様がそう言うと、ミコとマレクとスザンナは、「はねまわる雲」の展示館に来ていました。そこは、いろいろな形や大きさや色の、ふわふわした雲がいっぱいの空のようでした。

ミコが言いました。「見て。ジェシーとタラが、雲の上ではねてるわ！」

いました、いました。二人は、まるでトランポリンの上ではねるように、雲の上でとびはねて

いました。ただ、トランポリンの時よりも、ずっと高く！

すぐさま、ミコとマレクとスザンナも、いっしょになってとびはね始めました。みんなが雲から雲へと飛び移ると、色とりどりの雲が空中をぐるぐると動き回り、次にどの雲に着地するか、見当もつきませんでした。

「ねえ、見て！」そう言うと、ジェシーは空中高くはね上がって一回転し、それから雲を目がけて飛びこみました。すると、雲をつきぬけ、その下にあったほかの雲に着地しました。ほかの子どもたち

もみんな、はね上がって一回転し、雲を目がけて飛びこみ始めました。

今度はミコが雲を一切れつかみ、雲ボールにしてマレクに投げつけました。すぐに、子どもたちはみんな、雲から雲へと飛び移りながら、雲合戦を始めました。

さて、1日のしめくりは、公園の大きな川での小さなヨット乗りでした。船長は、男の子たちにロープの引き方を教えてくれました。帆に風が当たるように、ロープで調節するのです。女の子たちは、ボートの向きを変えるかじの取り方を教わりました。

子どもたちは、とちゅうで魚釣りもしました。釣り糸のはしには、針ではなく、ごちそうを付けてつるのです。魚がごちそうに食い付くと、糸がピクッと動きます。ジェシーは魚をボートの上につり上げて、ビックリ。魚がジェシーに向かってウインクしたのです。そしてはね上がると、また川の中に飛びこんでしまいました。



「魚は、ごちそうをありがとうって言ってたんだと思うよ。」とジェシーが言いました。

「みんな、見て！」タラがみんなを呼びました。「魚が水から飛び上がって、わたしの手の中に、こんなにきれいな宝石を落としていったの。」

「うわあ、わたしもそんな宝石がほしいわ。」とミコ。

二人の女の子は魚つりを続けました。まもなく二人とも、つなげて首かざりにできるほどたくさんの宝石がたまりました。

マレクは川に飛びこんで、魚たちといっしょに泳ぎ回りました。とても楽しそうなので、ほかの子どもたちもみんな、すぐに川に飛びこみました。魚たちも喜んで、彼らの周りをすいすいと泳ぎ回りました。

さて、そろそろ天国公園での遠足も終わりに近づいてきましたが、子どもたちは、何度でもこの天国公園に来られることを知っています。まだまだ、子どもたちに発見され、楽しんでもらえるのを待っている天国の楽しみが、たくさんあるのです。

* * *

いつかあなたも、自分で天国のふしぎを探検することができるようになりますよ！ それまでは、あなたを待っているすばらしい冒険を思い描きましょう。または、夢で天国のふしぎをいくつか見せてくださるように、イエス様にお願ひすることだって、できますよ。楽しみにできることが、とてもたくさんありますね。

お
終
わり

